



樹脂を用いた一連の作品はホンモノそっくりに作ってありますが、再現が目的ではなく、それは手段の一つです。再現することをオリジナルであると捉えると、複数あることや再生産することは相反します。その引き裂かれている状態、±0の状態になにか答えがあるのではと思っています。例えば「新しい過去」という言葉のように、なんだかよくわからないことは、見る側の想像力が流入し、モノコトの本質に近づくことだと思っています。



繰り返す事、集合させる事、合わせる事、つなげる事、などの連鎖的な行為によってその行為以前のモノやコトが変化し新たなポジティブなイメージが現れてくるものを提示したいと思います。小さなパワーが集合する事で大きなパワーへと変化していく様は自分自身を創り上げていく過程の様なものであり、それはいくらかでも大きくなり得ると思います。



アンバランスな2つの建物の間から、赤い線をみる。

イギリスのファッションデザイナー、アレキサンダー・マックイーンは、1994年、スコットランドに伝わる死の精（SPIRIT）、バンシーをテーマにしたコレクションを発表しました。バンシーは大声で死を知らせに来ると言われています。2010年2月11日、その内なる声に惹きつけられ、ずっと吸い込まれていきました。個人として世界に向ける姿勢は、そのように完結しました。そうするしか完結出来ない世界だったのだらうと思います。隙間は隙間のまま、空っぽで、外の壁板の隙間の1つを、赤い粘土で埋めました。

空っぽの世界から埋まった世界をみる。



まだまだ日本はヨーロッパと違い、古き良きものを大切にする文化が少ないように感じます。日本にも残すべきものが数多くある中、作品を通じて何十年何百年と次世代に残っていくものを創りたい。

自然破壊が進む中、人間よりも自然の変化に訴えを表す動物をモチーフにしています。私の住んでいるこの木津川市も例外ではなく、開発が進んでいます。破壊するのではなく、自然を守る心を少しでも私の動物からみいだしていただければと考えています。自然のちから、そして人間のちからを天平時代から受け継がれている技法で私は制作し続けていきたいです。



写真に撮るといことは、写真に撮らないということではないだろうか、と思うことがある。日々の出来事全てを覚えていられないのと同じように。写真に撮られたものが大切なもので、撮られなかったものがそうではなかったか、と問われるとどうも違うような気がするのだ。写真を撮るとい行為を繰り返すことで、私が意識していることは、むしろ撮られることはなかった膨大な時間についてかもしれない。



自然素材を使って子供のころよく遊んだ秘密基地のような空間を造りました。楽しく遊んで体験してもらえたらと思います。



「無題」 鹿背山ベースキャンプにて



木津川を散策して出会った一つひとつの小さな痕跡。目立つものではないがそこにあるからこそ感じられる時間の流れ、いぶき。  
しかしそれは過去の物だけでなく、私達の一つひとつも未来に繋がっていく痕跡という事ではないか。



充ちる響き。交わされる視線。呼応する音々。  
遙かな時を生きてきた米蔵に抱かれ、音楽が息づき、  
空間がひとつの大きな響きとなった。

イーゼル芸術工房は、『トキワ荘』にならい共同生活をし、芸術活動のみで生計をたてている若手芸術家集団です。音楽家のみならず小説家など様々なアーティストが活動を共にしております。

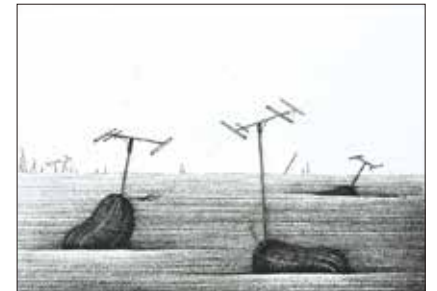


## 料亭川喜<sup>かわ き</sup> ■ 木津・本町エリア

旧いづみ橋のたもとの老舗料理屋。かつては舟宿であった。店の方にその起源をお聞きしましたが、あまりに古すぎてわからないとのこと。ここは奈良街道が木津川にぶつかる場所であり、多くの物資が船から降ろされたり積まれたりした港の真ん前だった。もしかすると万葉の時代からずっと、旅人を迎えるための建物があったのかもしれない。味わいのある玄関ロビーは近代に手が加えられ、天井と床に昭和レトロの趣も残る。今回は、玄関ロビーと前庭の他に、路地から眺める廊下というおもしろい使い方をさせていただいた。



気になるのは、自分のいる 日常の空間。  
いつも 通る道。  
いつも いる 部屋。  
そこに ぽっかりと不思議な  
通りみちがあいているかもしれません。





手足をつける。これがこだわり。どんなモノにも手足をつける。そうすると動きが出てくる。“いきもの”のようにみえてくる。今にも動き出しそうな、モノ、たち。今回は、手足のある一輪挿し、たくさん。場所の雰囲気とのミスマッチ感を出した。日常の中の非日常、ちょっとした笑みがこぼれるといい。



## とく<sup>り</sup>土久里邸茶室 ■ 木津・本町エリア

古い文献に度々登場してくる木津の旧家。「とくり」と読む。母屋は築250年以上と言われる茅葺き屋根で木津の歴史を今に伝えるが、茶室は昭和50年に建てられたというから、特別古いわけではない。ただ、京都祇園の数奇屋大工・武内幸二氏の遺作となったこの茶室、旧木津町長も務めた土久里和秀氏が、彼の思うままに造らせたという何とも贅沢なもの。今回初めての一般公開をお許しいただき、多くの市民がその茶室でお茶を服し、豊かな時間を過ごせたのは、本当に素晴らしいことだった。ちなみに、〈和千庵〉の由来は、ご夫婦のお名前から一字ずつとったという。愛情あふれる茶室である。



「その土地で採れた土で茶碗を作り、茶会をする」ということを、いつかしてみたいと思っていました。木津川アートによって茶室・土・茶・水・花、そして、作家・插花の方、素敵な方々に出会い実現できました。木津川市は特産品の茶、鹿背山焼などの文化・歴史があり茶会をするのによい所でした。

参加して下さった方々、皆様に感謝。



古来 木津川市地域は 木津川の恵みに育まれ発展してきました。木津川の水、神々、栄え滅びた文明、そこに暮す人々をテーマに表現しました。



## 南都銀行 旧木津支店 ■ 木津・本町エリア

1950年代の建築という。木津川市庁舎の南側、旧163号線沿いに建つ。合併により、木津町役場は市庁舎に建て替えられ、南都銀行の新支店は駅前へ移動、旧館は約2年間使われていなかった。道路拡張のため、取り壊されることになったのだが、その前に「木津川アート」の展示会場として貸していただけることとなった。広いフロア、がっしりした階段、2階部分が吊り天井になった空間、会議室や更衣室、食堂、ATMコーナーなど、全館余すところなく使わせてもらえるという。スタッフは狂喜乱舞し「なんと！美術館」と銘々。自由な表現ができる空間へと生まれ変わった。倉庫を利用した「記憶秘密基地」は、なくなっていく建物へのオマージュであり、初めて訪れた人々にも共感を与えた。



日本建築の梁や柱の構造を意識した架空の建築物をテーマに立体作品を制作しております。古い日本建築の少ない北海道に生まれ育ち、日本の伝統文化にカルチャーショックを感じ、まるで異文化に触れるように、自身の中から失われてしまった文化の再構築を目指すように制作をはじめました。日本建築を再現したような大型のインスタレーションを展開しております。今回の作品の設置場所は、近年取り壊しが決定している旧銀行の建物内で、営業当時の面影を残しながらも、散乱している現場の環境を取込みました。展示会場として一時的に再生されながらも、何れは、また頽廃してゆく様子を暗示させています。





「記憶秘密基地」には、3人それぞれの手製の針穴（ピンホール）カメラと、そっと流しこむように撮った写真たち。例えば一木津川市で心惹かれた風景や銀行に残されていたモノ、日々の中で出会った景色や思いの記憶—が集まっています。12日間開いた秘密基地と針穴小屋の景色は、誰かの記憶となっているかもしれません。

いつかどこかで扉が開く時まで。また。



建物の機能が失い、空っぽになってしまった空間に、私が常日頃から身に着けている衣裳や跡地に残された遺物を用いた作品を制作し配置しました。脱ぎ残された衣裳の形や日に焼けて残された物の形などを、再現または強調することによって、この場所「での」「である」痕跡を残したいと考えました。



息づかいの聞こえる暮らしの街並みを歩きながらスケッチをはじめてもう8年。耳を澄まし、目をひらいて、折々の季節のなかでアドレナリンが出てきます。知らないマチ、知らないヒト、知らないコトがいっぱいです。自分の成長に首をかしげて出来ることなら、カラダのつづく限りスケッチをつづけたい。



子供の頃、顕微鏡を持ち出して水溜まりの水を見たことがヒントになっている。一見水溜まりの水は何も無いように見えるが、この中にはさまざまな微生物が生きており、一つの小宇宙のように生態系が形成されている。何も無いと思われていた場所に生命があるという感動を表現しようと考えた。

展示会場は目が慣れるまで何も見えない。鑑賞者は奥行きを失うような空間の中をさまよい、さまざまな光るオブジェに出会う。このオブジェは町の記憶の断片、宝、使われなくなったものなどをデフォルメさせたものである。忘れていた場所やモノをこの空間で見つけることにより、鑑賞者の記憶の中に再生されていく。



「フキだしproject」は言葉を「フキだし」の形でビジュアル化するプロジェクトです。「フキだし」は人種、性別、年齢などの社会的カテゴリーとそれを取り巻く環境（場所、時間）と言葉により様々な意味をなします。つまり私の作品ではバルーンはひとつのアイテムにすぎず、人、環境、言葉（フキだしに書かれた）があって初めて一つの作品となります。

今回の木津川アート2010では「社会的カテゴリーとして木津川市民」「環境として木津川市」「言葉として京都府の方言」で人と言葉の関係性を考えてもらい、そこにしかない「景色」を表現したいと考えました。



染 projectとは…

その土地の水に関する地形や文化、歴史をモチーフとして形に起こし、それをその土地の住民のメタファーとなる衣類等の媒体に落とし込むことで「染」が出来上がる。[水×人×地域]の新しいカタチを形成し、また製作物を着用することで共鳴を果たします。

“SHIMIPROJECT / KIZU-RIVER” “染project / 木津川”

旧南都銀行の元々吹き抜け部分だったが晩年塞がれた、2階の不思議な空間にワンピースのように長い染Tシャツを複数枚展示。共町の人々にTシャツを着て頂き、その様子をスライドショーで流すことで地域との共鳴を表している。



私はここに生まれ、育ちました。4年ほど仕事で町を離れたあと、再び住み始めた故郷は何もかもが新鮮に見え、このあたりの自然や町並みがとても美しいことに初めて気づきました。それらと向かいあったり、撮影したりする時間は、とても幸せなもので、私はとりつかれたように撮影しました。

ところが撮影しはじめて気づいたのですが、開発の波に押しつぶされるように、風景は次々と変化し、もう一度撮影するつもりだった場所が、同じ場所だとは思えないほど見事になくなったりしてきました。残念なことではありますが、せめて写真に残すことで記憶の風景を大切にしていきたいと思っています。



写真を契機とした観者に内在する時間性。

2003年のgallery coco（京都）での個展「displacement」では、ギャラリー入口を起点として、動線上の光景を撮影した写真を展示した。展示された写真は、観者がそれを見る時点において少し前の過去を表し、同時に観者自身が数秒前に実際にそこにいた時点での未来を表している。

木津川アート2010では展示場所を起点として会場出口までの動線上の光景を撮影し、それらを展示した。展示された写真は、今後体験するであろう未来を表し、その後見る光景は少し前の過去になる。



インスタレーション作家小原典子さんの作品空間の中ヨガを行いました。作品とワークショップのコラボレーション企画です。たくさんの光が浮かぶ真っ暗な空間は、まるで宇宙のよう。その中で、自分の体という小宇宙と向き合いました。暗闇の中、周りが見えないからこそ、感じられることもあり不思議と心も静かになります。



## 木津川市 庁舎 ■ 木津・本町エリア

木津川市誕生に伴って平成20年竣工。北側が階段状になる外観が特徴の7階建てビル。今回の木津川アートでは唯一の新築での展示場所だった。ロビー吹き抜けでのバルーン展示は、初めての試みということでスタッフ一同緊張したが好評だった。また、駐車場入り口の展示も、脇見の危険があるという意見もあったが、お年寄りから子どもまで、さまざまな人が楽しそうに写真を撮る姿が印象に残った。数々の難問をクリアして、多くの市民に見ていただけたこと、市役所という場所がみんなの笑顔で包まれたことが、最大のメリットだった。



市庁舎ではフキだしprojectの一環として行ったワークショップで地域の人と一緒に制作したバルーンを展示しました。

そのバルーンを市庁舎のエントランスに展示することにより、地域の人にはもちろん今回の木津川アートに訪れた人に、バルーンに書かれた言葉をとおして、木津川市民の今、そしてもう一度木津川市を確認してもらいたいという思いを込めて展示しました。



この作品は安堵とたそがれを人体のカタチに落とし込んだものです。彼（作品）は、あるひとつの物語が終わった後のエンディング、余韻のようなものに浸る甘く酸っぱいひとときをナビゲートしてくれる案内役です。現代の人たちに対して「何をそんなに急いでいるのか？」という思いから、のんびり屋さんを気どって制作しました。材料はアルミとブロンズを使い、鋳造技術を用いて制作しました。



これら3点は2009年の制作です。作者も鑑賞者も眺めているうちに、イメージや遠い記憶が、ふわふわと増殖し続けるような作品になれば、と思いながら制作しました。